ナラティブとワーグナーの《指環》

ミーメとワーグナーの課題

2023/10/07

さあ、ＮＨＫの土曜講座の《ニーベルングの指環》の《ジークフリート》も、いよいよ、佳境に入ってきました。第２幕です。ミーメがジークフリートを連れて、竜のすむ洞窟へやってきました。竜に化けた巨人のファフナーから指環と隠れ兜を奪おうというのです。臆病で力のないミーメは、それを、恐れを知らぬジークフリートにやらせようとするのです。でも、待って下さい。それを成功させるには、ミーメの前にいろいろな問題が山積しています。それを、ミーメが、いや、台本作者のワーグナーが、まず、ミーメに先だって解決しなければなりません。

話題の言葉「ナラティブ」

いま、話題の言葉に「ナラティブ」があります。これは、経済学や医学や人類学でも使用されている考え方で、「ナラティブ」（narrative）とは、「ナレーション」（narration：語る）と同じ語源で、日本語で「物語化する」という意味です。でも、すでに出来上がっている物語を語るのではなくて、それぞれが自分がいま一番語りたいことを語るのです。

自分が、いまやりたいことを、また、いま考えている考えを、「一つの物語として新しく語る」のです。いってみれば、ナラティブとは、語り手の「やりたいこと」「希望」「志(こころざし)」「計画」であると同時に、「野心」「野望」「魂胆(こんたん)」「下心(したごころ)」を明確にして、それを実行することを覚悟するために語ることなのです。なにごとも、野心や下心を「語る」(ナラティブする)には、語り手本人が、始めから終わりまで、物事をやり遂げる「主体的なエンジン」であると同時に、いま置かれた状況を「客体的」に語らなければなりません。従って、いつも、物語の主人公は、「秘密を語る本人＝私」で、一人称です。そして、誰もが、先ず、「なにをしたいか？」という目標を主体的にもっていて、それを語りたくて、語ります。そして、「物語の目標」を達成するためには、それを妨げる「問題点」や「課題」を客観的に「予測」して、それも一緒に語らなければなりません。そして、それを解決するための「手段」や「方法」を「想定」して、語らなければなりません。このとき形成された一連の新しい物語が、「ナラティブ」なのです。

「ナラティブ」は、「語ること」ですから、すでに「語られたもの」、すなわち、「既成の物語」はナラティブではありません。「既成の物語」を変えるのなら、「パロディ」を作れば良いのです。「ナラティブ」は新しい行動計画であって、まったく原案とは別の物語であり、「パロディ」なんかではありません。既成の物語を実現するための「行動計画」なのです。状況が変わると、計画も変わります。そのとき生まれるのが、新しい別の物語「ナラティブ」なのです。《ジークフリート》の前半(第1幕)でミーメは、「竜からの指環奪還物語」を一人で語ります。第２幕の前半では、ジークフリートがミーメを殺し、思いがけなく指環と隠れ兜を手に入れる物語を、わけも分からず、ジークフリート本人が語る「ナラティブ」になります。ジークフリート本人は、まだ、指環の謎も、隠れ兜の奇跡も、これからの自らの行く末もなんにも知りません。「ナラティブ＝語り」以前の問題です。ここで登場するのが森の小鳥です。小鳥はジークフリートにささやいて、彼を未来の運命へと導いて行くのです。

オペラは、もっともナラティブな芸術

もっとも「ナラティブなモノ」は、オペラです。なぜなら、舞台の上で歌われるオペラのアリアは、「ナラティブ」だからです。なぜなら、オペラのアリアは三つの部分からできているからです。「レチタティーヴォ」と「カヴァティーナ」と「カバレッタ」です。

まず、アリアが歌われる出だしの「レチタティーヴォ」は「レチ：語り」(recitare イタリア語で朗読する)のことで、これから歌うアリアについて、「こういうことを歌います」と歌の内容を前もって説明します。「レチタティーヴォ」は、歌うよりも語るので、日本語では「叙唱」と訳されています。

そして、つづいて歌われる抒情的にゆっくりした歌「カヴァティーナ」(cavatina)は、イタリア語の動詞「カヴァーレ」(cavare •掘り起こす)から来た言葉で、心の中に密かに隠されていた「本心」が、なにか感動的な出来事に出合ってときに思わず心の底まで掘り起こされて、口から出てしまったことをいいます。まさに、「ナラティブ」です。

最後に歌われる速い部分の「カバレッタ」(cabaletta) は、掘り起こされた心の本心(カヴァティーナ)を実現しようと、覚悟決めるときに歌うのです。「馬」を意味する語「カヴァロ」(馬•伊:イタリア語 cavallo/西:スペイン語 caballo)と関係があるともいわれ、「意馬心猿」(馬が走り猿が騒ぐのを制しがたいこと)のごとく心が躍り、勢いよく歌われる速いテンポの歌が、「ギャロップ」(馬の速駆け)を思わせるためにこう呼ばれたとも言われています。

オペラの登場人物はだれでも、ときによって、舞台の上で、観客のみんなが観ている前で、「予想」を外れた、いま自分の置かれた与えられた状況を、瞬時に、自分に都合の良いように「改変」しなければなりません。急な、「プロット」（解決策）の変更、すなわち、「ナラティブ」です。この場合の「ナラティブ」とは、「目標を達成するために妨げる紆余曲折の障碍を予測して、万全の対策を想定すること」です。だれが「想定」するかといえば、これが作り物のドラマオペラ＝楽劇」である以上、むろん、ミーメではなく、ワーグナーの仕事です。

ナラティブな魔術や役者たち

１９世紀半ばのヨーロッパの芸術家ワーグナーがナラティブするのは、新しい国民国家の成立です。そのために、《ニーベルングの指環》という「世界征服のナラティブ」を語ります。そこに出てくる「ナラティブな魔術や役者たち」は、「世界を征服する指輪」であり、「なんにでも変身できる隠れ兜」であり、「三つの世界に住む者たち（神々・人間・巨人・動物・ニーベルング族）」であり、「愛し合い、助け合い、いがみ合う８組の兄弟姉妹たち（三人のラインの乙女・神々・アルベリヒとミーメ・ファゾルトとファフナー・九人のワルキューレたち・ジークムントとジークリンデ・グンターとグートルーネ・三人のノルン）」であり、「竜」に「小鳥」です。

さて、ここで、「《指環》兄弟クイズ」です。いま、「8組の兄弟姉妹」と申しましたが、正確に言えば、実は、もう一組、「兄弟」がいます。だれとだれか、おわかりでしょうか？　【答は末尾】

ところで、ミーメは、指環と隠れ兜を手に入れるために、それを妨げる「問題点」や「課題」を、先ず、予測しなければなりません。これは前に、「ミーメと私たちの課題」として配布資料でお話しました。

課題１　まず、ジークフリートを竜の住む洞窟へ連れていかなければなりません。
課題２　そして、竜を退治させなければなりません。
課題３　そして、洞窟のなかに隠されたたくさんの金銀財宝のなかから、指環と隠れ兜を選ばせて、それを見つけて持ってこさせなければなりません。
課題４　そして、この二つをジークフリートから取り上げなければなりません。
課題５　そして、この二つを狙っている兄貴のアルベリヒと神々の王ヴォータンを出し抜いて、自分のものとしなければなりません。
課題６　そして、世界を征服して、この世の王となって、わが世の春を満喫しなければなりません。

さて、取り敢えず、この６つの課題は、ミーメ本人の課題でもありますが、元々は、作家のワーグナー自身が解決しなければならない課題でもあります。むろん、ミーメよりも、ワーグナーの方が問題解決に苦労するでしょう。ここで、ワーグナーに「ナラティブ」の役割が出てきます。

ワーグナーのナラティブ

さて、ミーメが予測した課題に対するワーグナーの答は、ワーグナー自らが、色々な場合を「想定」して、「物語」を語らなければなりません。「ナラティブ」の登場です。

ミーメの課題１；ジークフリートを洞窟へ連れて行くこと。

まずミーメは、ジークフリートを竜の住む洞窟へ連れていくことですが、ジークフリートが、森を出て、たくさんの人間が住んでいる世間へ出ていきたいという思いに便乗して、「世間には恐ろしい人間がたくさんいて、恐ろしいことをするのだ。まず、お前は、なにが恐ろしいのかを知らなければ負けて殺されてしまうぞ。まず、恐怖を覚えなければならないのだ。そのために、お前を恐ろしい竜が住んでいる洞穴へ連れて行って、恐怖をあじあわせてやる」とミーメ＝ワーグナーはナラティブにいいます。素朴な性格で、人の言葉を素直に信用するジークフリートは、直ぐにその気になって、ミーメと一緒に喜んで竜の所へでかけます。まんまと、ミーメ＝ワーグナー作戦は成功しました。

小鳥の助言の重要さ

ミーメの課題２：そして、竜を退治させなければなりません。

そして、竜を退治させるのですが、ここは、この楽劇全体の中でも呼び物の一つです。そのためには、ジークフリートと竜を真っ正面から対決させなければなりません。向かうところ敵なき、巨大で、剣も刺さらぬ鉄の鱗をもった恐竜は、ちっぽけな一人の青年など相手にするわけはありません。ジークフリートと竜を一対一で戦わせるには、洞窟のなかで、気持ちよく惰眠を貪(むさぼ)っている竜を起こして、怒らせて、洞窟から出させなければなりません。それで、ワーグナーは、竜を怒らせるために、ジークフリートに、騒がしい角笛を大きな音で吹かせることにしました。そのために、ここで可愛い小鳥が登場します。森の小鳥が、なにかをジークフリートに告げます。ジークフリートは、小鳥がしきりにさえずっているので、なにかを教えてくれていることを知ります。それに応えるために、ジークフリートは、草をちぎって草笛を作り、吹き始めます。でも、上手く吹けません。仕方なく、ご自慢の角笛を出して朗々と吹き始めました。ジークフリートの主題です。上手く吹けたので、ますます調子に乗って大きな音で吹き鳴らします。気分良く眠っていた竜も、その音で眼をさまします。

ジークフリートが銀色の角笛を取り出して吹き鳴らすと、舞台後方で何かが動く。恐ろしいとかげのような姿をした巨龍ファフナーが、洞窟の中のねぐらから身を起こしたばかりである。ファフナーは、木の茂みをなぎ倒しながら、底のほうから、さらに高い場所にのたくって行き、その上半身はすでに高い場所に届いている。今やファフナーは、あくびをするような野太い息を吐き出す。

ジークフリート　(振り返り、不思議そうにファフナーを見る)ハハハ！ぼくの歌は、また愉快なのを呼び出してきたもんだ！　お前だったら、ぼくのいい仲間になれそうだ！

ファフナー　(ジークフリートの姿を見て、丘の上で動きを止め、そのままそこから動かない)　何だ？いったい？

ジークフリート　おい、お前は獣のくせに、話はできると言うのだったら、何かぼくに学ばせてくれるんだろうな？　ここにいるのは、恐怖を知らない男だ。お前、恐怖ぐらいは教えられるんだろうな？

ジークフリートは剣を抜き、ファフナーに切りかかったが、まるで挑発するようにその場を動かないでいる。ファフナーは、丘に向けて巨体をのた打たせ、鼻の穴からジークフリートに鼻息を振りかける。ジークフリートは鼻息をかわし、ファフナーの近くに駆け寄り、

脇腹の近くで構える。ファフナーは尻尾でジークフリートを捉えようとするが、もうすぐ捉えようという時、ジークフリートは一飛びでファフナーの体を飛び越え、尻尾に傷をつける。ファフナーは、大声で吠え、尻尾を勢いよく後ろに引っ込めると、上半身を木のように直立させて、ジークフリートを体ごと押し潰そうとする。だが、そのためにファフナーが胸を見せた瞬間、ジークフリートは即座にファフナーの心臓の在りかを見抜き、剣を柄まで突き立てる。ファフナーは苦痛のあまり、ますます高く棒立ちになり、ジークフリートが剣を離して脇に離脱した直後、傷を下にして崩れ落ちる。

このファフナー登場の場面のように、まず、小鳥を登場させ、草笛で小鳥との会話に失敗させ、お得意の角笛を登場させ、その角笛の大きな音で竜を怒らせて、洞窟から竜を登場させ、そして戦って殺す ― このようにして、ジークフリートは竜をやっつけたのです。極めて論理的な展開で、無理がありません。それに極めて音楽的な処理です。ワーグナーの巧みな一連の「ナラティブ＝プロット」が冴えます。

さて、この「小鳥」ですが、一体なにものなのでしょうか？　「ジークフリートの母親の魂だ」という説もあります。なるほど。そういえば、ジークフリートが一人、洞窟の周りの森の中で一人寂しげに、会えなかった母親を偲んで歌うシーンがあります。そのあとで小鳥が現れるのですから、心配したジークリンデがジークフリートを守るために現れたのです。それで物語の筋が合い、ここで孤独なジークフリートの前に現れる母親の愛の偉大さも感じられて感動的です。

ところが、バイロイト 1992 版の演出家ハリー・クプファーは、この神秘な小鳥を、ヴォータンが用意した手飼いの小鳥に仕立て上げてしまいました。アルベリヒを一人洞窟の前に残して馬に乗って飛び去ったヴォータンを再び登場させ、彼はわざわざ小鳥を持ってきてジークフリートのお相手をさせたのです。もともと、ヴォータンは、密偵としてカラス

を二羽いつも使っています。こういったヴォータンと鳥との前例はあるのです。それをクプファーは使ったのです。その上に、ヴォータンの腰にはジークフリートと同じような角笛まで持たせています。ジークフリートが朗々と角笛を鳴らして自分の存在を誇示すると、ヴォータンも持ってきた角笛でそれに合わせて吹いて、ジークフリートを賞賛するのです。でも、これは、ワーグナーの総譜にはまったくないものなので、あまり奨励出来ません。

森の小鳥の偉大な功績

さて、この森の小鳥です。この小さな小鳥の登場が、意外にも、《ジークフリート》全体に、いや、《指環》全体に、多きな影響を与え、多くの重要な役割を果たします。その、小鳥が果たした重要な役割とは、ミーメの課題を達成させてやることです。

ナラティブな翻訳機「竜の血」

ミーメの課題３　そして、洞窟のなかに隠されたたくさんの金銀財宝のなかから、指環と隠れ兜を選ばせて、それを見つけて持ってこさせなければなりません。

ジークフリートに指環と隠れ兜への認識がなければ、この《指環》物語における、ジークフリートの存在意味がありません。竜を殺したジークフリートに、洞窟のなかに入らせて、隠されたたくさんの金銀財宝のなかから、指環と隠れ兜を選ばせて、それを見つけて持ってこさせなければなりません。

森の小鳥の助言：指環と隠れ兜を見つけなさい。

そこでまた、小鳥の登場です。ワーグナーは、今度は小鳥に、ジークフリートに指環と隠れ兜の存在を教える重要な役を担わせました。

ナラティブな翻訳機「竜の血」

でも、そのためには、ジークフリートが小鳥の歌を理解しなければなりません。そこで、今度は、翻訳機「竜の血」が新しく登場するのです。

ジークフリートは龍の胸から剣を引き抜きます。すると、その時、返り血がジークフリートの手を濡らし、彼は激しくその手をかばいます。「火のように熱い血だ！」とジークフリートは我知らず指を口に持って行き、指についた血を吸い取ろうとします。その瞬間。小鳥の歌が聞こえてきます。

ジークフリート　どうやら、あの鳥たちは、このぼくに何かを語りかけているようだ。この竜の血をなめたおかげで、そうなったのかな？　ねえ、きれいな小鳥さん、いったい何を歌っているんだい？

森の小鳥の声　（ジークフリートの頭上の菩提樹のこずえから）　わあい！　ニーベルングの宝は、ジークフリートのものよ。洞穴にある宝を見つけちゃえばいいのになあ。隠れ頭巾を手に入れれば、きっと楽しい冒険に役立つよ。それに、指環まで探り当てちゃったら、きっと世界を支配できちゃうなあ！

ジークフリート　（穏やかに息を吐いて、うっとりしたような顔で、小鳥の歌声を聴いている）　小鳥さん、いい助言をありがとう。言う通りにしてみるよ！

ジークフリートは後ろを振り返り、洞窟に向かって降りて行くので、すぐに全身が見えなくなります。

そして、間もなく、小鳥の「ツイッター」（さえずり）のおかげで、竜を殺したジークフリートは、間違いなく、洞窟の奥から指環と隠れ兜を持って出てきました。ヴォータンも、自分に代わってジークフリートが指環を手に入れることを願っていたのですから、これで一安心です。このことは、《指環》の物語の中で一番大事なことなのです。指環が無事に、神から人間へと継承出来たことで神々の役割は終わったのですから。これで「神々の没落」が、可能になって、ここから人間の世界が始まるのです。もし、小鳥の「ナラティブ＝さえずり」がなければ、恐怖の対象である竜を殺すことだけが目的のジークフリートは、洞窟の中にある指環にも、隠れ兜にも、気がつかなかったことでしょう。そのことを無邪気なジークフリートに教えた小鳥の役割は大きいのです。従って、小鳥はヴォータンの差し金であると言うことは出来ますが、そのことはヴォータン自身が否定します。次の第３幕の冒頭で、ヴォータンが知の神エルダに訴える台詞の中で聞かれます。

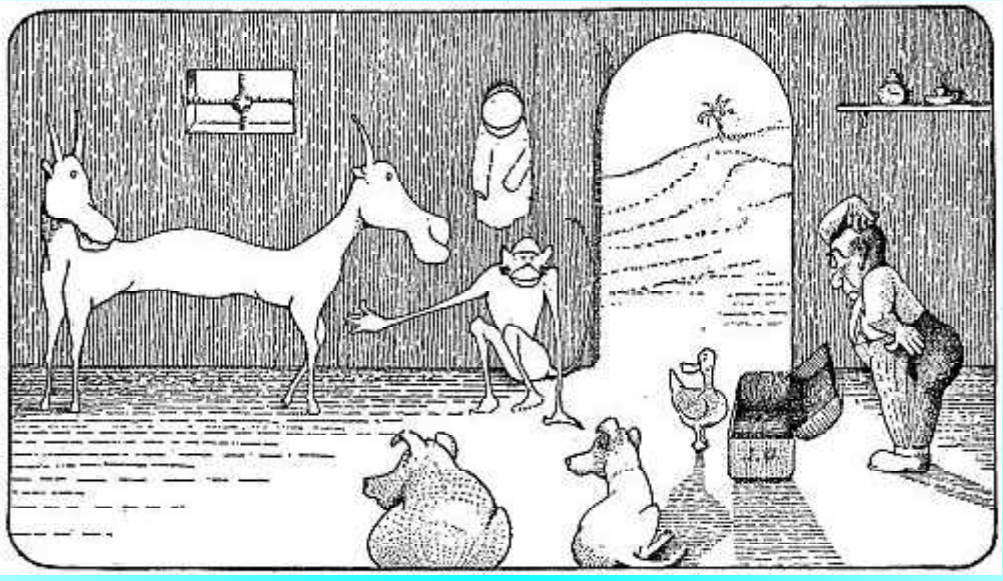
ヴォータン　わしに選ばれたくせに、わしのことを知らぬあの大胆きわまりない子は、わしの指示を受けず、ニーベルングの指環を手に入れたのだ。愛を楽しみ、妬（ねた）みを持たぬ、あの高貴な少年の前では、アルベリヒの呪いすらその力を失ってしまう。なぜなら、この子は恐怖と無縁だからだ。

ここでも、「竜の血」が小鳥の言葉を理解させ、それがジークフリートに指環と隠れ兜の存在を教えてくれたのです。「竜退治」→「竜の血」→「小鳥の言葉」→「指環と隠れ兜の発見」へと、物語は面白おかしくつづきます。ワーグナーの巧みな一連の「ナラティブ＝プロット」が冴えます。

おしゃべり小鳥のナラティブ

したがって、指環の物語を完結させるためには、どうしてもこの小鳥の登場が必要なので

した。これは、ワーグナーのお手柄です。「小鳥が話す」（ナラティブ）というアイデアは、ワーグナーばかりではありません。世界一の動物医者のドリトル先生の始まりは、永年飼っていたオウムのポリネシアから、先生が動物語を学んだことでした。『ドリトル先生』（Doctor　Dolittle）物語は、20 世紀前半にアメリカ合衆国で活動したイギリス出身の小説家ヒュー・ロフティング（1886 – 1947）による児童文学作品のシリーズです。第 1 作『アフリカゆき』は 1920 年に米国で刊行されました。ワーグナーの《指環》（《ジークフリート》は1876初演）に遅れること４０年以上にもなります。



竜の血の翻訳効果の賞味期限

でも、途中で水を差すようですが、この竜の血の、鳥の言葉や相手の心が読めるという「翻訳効果」はどこまで、まだ、だれにまで、持続するのでしょうか？　これが気になります。

神々　相手といえば、まず、神々です。ブリュンヒルデを探しに行く途中で出会った老人「さすらい人」とのやりとりで、ジークフリートはヴォータンの心が読めなかったのです。どうやら、神々の首長のヴォータンの心には「バリア」（防御の盾）がかかっているのでしょう。ジークフリートは、ヴォータンとの間の会話に、祖父と孫との愛情も感じず、なんの情報を与えてくれません。結局、二人は、会得要領を得ず、意志も交流もなく、喧嘩別れのままで別れてしまいます。ジークフリートがもう一人出会った神といえば、ブリュンヒルデです。でも、ブリュンヒルデはもうヴォータンによって神性を剥奪されているのですから、普通の人間です。神々のようはバリアはないはずです。のちには、ジークフリートはブリュンヒルデのたくらみを読み解けないままで、だまされて生命を落とします。これは、実は、《指環》の最後の《神々の黄昏》でのお話ですので、ハーゲンの調合した「忘却薬」を呑まされたジークフリートには、竜の血の効果はもうなくなっていたのかも知れませんね。

ニーベルング族　また、ニーベルング族です。最後の《神々の黄昏》で、自分を殺そうとする悪者ハーゲンの心を読めなかったのでしょうか？　ギービヒ家にやって来たジークフリートは、のっけから、ハーゲンに「忘却酒」を飲まされてしまいます。このときは、ミーメのときと違って、竜の血からのなんの警告もなく、簡単に飲まされてしまいます。この「忘却酒」がジークフリートを死なせるのです。ハーゲンは、ミーメと同じ血を引くニーベルング族の一員です。ハーゲンの悪巧みを読み解く竜の血の効果はあるはずです。ワーグナーの弁明を聞きたいものです。

ラインの乙女たち　　折角のラインの乙女たちの貴重な忠告も、ジークフリートには通じませんでした。これも、ハーゲンの「忘却酒」のなせるワザです。ナラティブの名手ワーグナーの勝利です。

ミーメの課題４　指環と隠れ兜の二つをジークフリートから取り上げること。

このミーメの課題の達成を邪魔したのが、今度は小鳥の助言でした。小鳥は、ミーメがジークフリートを殺そうとしていることをジークフリートに教えるのです。ミーメは、洞窟から持ち出された指環と隠れ兜のこの二つをジークフリートから取り上げなければなりません。ここでも、竜の血の魔力が効を奏して、小鳥の助言が、ジークフリートの生命を救います。

森の小鳥の助言：ウソつきミーメを信じるな。

森の小鳥　わあい、頭巾も指輪もジークフリートのものだ。でもね、ウソつきのミーメを信じちゃダメだよ。あのウソつきの甘い言葉を、ジークフリートがしっかり聞き分けられればいいけどなあ、ジークフリートは、ミーメが心に思った通りにミーメの言葉を聴き取れるはず。竜の血をなめたおかげなのよ。

敵方であった竜のその血がジークフリートの生命を助けるのは皮肉です。ミーメは、毒汁を飲ませてジークフリートを殺そうとします。でも、おしゃべりなミーメは、毒汁作戦をしゃべってしまいます。むろん、心の中での会話なのですから、他人のジークフリートに聞こえるわけはありません。でも、そのときのジークフリートは、竜の血をなめたおかげで相手の心が読めるようになっていたのですから大変です。ミーメの殺意を知って、ジークフリートは、ミーメを一撃の下に刺し殺してしまいます。

ジークフリートの欠点の一つは、人の言うことをなんの疑いもなく素直に聞くことです。普段なら、ミーメが差し出した飲み物を、のどが乾いたジークフリートは勧められるがままに、そのまま呑んでしまうところでした。この小鳥の助言が、ジークフリートの命を救ったのです。このことから、小鳥が、ジークフリートの母ジークリンデの子を思う魂であると言うこともできます。

ミーメの死によって、ミーメの野心は消えました。それで、次のミーメの二つの課題は、実現せずに終わります。

ミーメの課題５　指環と隠れ兜の二つを狙っている兄貴のアルベリヒと神々の王ヴォータンを出し抜いて、自分のものとしなければなりません。
ミーメの課題６　そして、世界を征服して、この世の王となって、わが世の春を満喫しなければなりません。

ここから、《指環》のナラティブは、ミーメからジークフリートへと移動していきます。「ナラティブ」は、本来、夢を語り、良き未来を語り、問題を解決する方策を語り、建設的なモノであるべきなのですが、ワーグナーの「楽劇」はそうばかりではなさそうです。

森の小鳥の助言：魔の山にいるブリュンヒルデの存在を教えたこと。

そして、小鳥ははっきりと、その女が「ブリュンヒルデ」であるとその名前まで告げます。

森の小鳥　わあい、ジークフリートは悪い小びとを打ち倒しちゃったぞ。わたしは、彼にもってこいのきれいな女の子を知っているよ。その子は岩山の上に眠っていて、その周りを炎が取り巻いている。だけど、はじける炎をかいくぐり、花嫁の目を覚ましたら、ブリュンヒルデは彼のものになるのよ。
花嫁を手に入れる者、ブリュンヒルデを目覚ます者、それは臆病者ではあり得ない。それができるのは、恐怖を知らない者だけよ！

この世で、神々の世界から人間の世界への権威の移譲を可能にするには、世界を征服出来る指環の存在と世界を征服できる英雄の存在が人間世界において必要です。この二つが共に威力を発揮するためには、指環と英雄を支える女性、ブリュンヒルデが必要なのです。ジークフリートが、これまでのヴォータンの行動の経緯に詳しく、ヴォータンの意志を継ぐブリュンヒルデに出会わなければ、神々から人間への権威の移譲はできません。ここでも、ブリュンヒルデの存在を告げる小鳥の呟きは、とても大切な「ナラティブ＝情報」です。でも、だれが小鳥に、ブリュンヒルデがなくて敵わぬ存在であることを教えたのでしょうか？　ヴォータンその人であるに違いないのです。クッファーの演出も、あながち間違いとは言えません。そのことを、ワーグナーは一言もいいません。いったい どうしたことでしょう ワーグナーさん!

ヴォータンとジークフリートの出会い

竜を退治して、洞窟から指環と隠れ兜を手に入れたジークフリートは、小鳥の案内で、ブリュンヒルデという娘が眠っているという魔の山を目指して進んでいきます。すると、突然、案内役の小鳥は、ヴォータンが連れていた二羽のカラスに驚いてどこかへ逃げていってしまいます。ジークフリートは、慌てます。そのとき、一人の老人が声を掛けます。だれあろう、ジークフリートがくるのを待ち構えていたヴォータンです。《ジークフリート》の第３幕で、初めて、ヴォータンとジークフリートが出会います。むろん、ヴォータンは相手が孫のジークフリートであること先刻承知で、彼が通るのを道ばたで待っていたのです。どうしても、一度は会っておきたい相手です。神々の念願を彼一人に托すのですから当然です。ここから、また、ヴォータンお得意の「問答」が始まります。老人の問いに、若者は一つ一つ、正直に答えます。でも、この問答の答は、私共、熱心な聴衆にとっては、先刻、承知のことばかりです。　なんの新しい情報も、もたらしません。したがって、こ

のシーン全体は無駄でした。

さすらい人　　若者よ、どこに行くのだ？
ジークフリート　おいらは、岩山を探しているんだ。その岩山の周りには炎が取り巻き、女の人が一人で眠っている。おいらは、そのひとを目覚めさせたいんだ。
さすらい人　　その岩を探すようにと、だれがお前に言ったのだ？
その女を求めよと、だれがお前に言ったのだ？

ジークフリートは、「小鳥だ」と答えて、「小鳥の歌声を聞き分けられるようになったのは、竜の血のおかげだ。竜の血を舐めたら、小鳥のさえずる声が理解できたのだ」。「お前にその強い竜を倒すようそそのかしたのはだれなんだ？」という問いにも、「ミーメだ」と答ますが、次の「竜を倒すそんな硬くて鋭い剣を、そもそも、だれが作ったんだ？」という問いには答えられません。ジークフリートにとっては、これは難問です。問答に負けたジークフリートは、ついに腹を立てて老人を邪険に追い払おうとします。

ジークフリート　そんなこと、おいらは知るかい！　問答好きの年寄りめ、いい加減にしろ。おいらをこれ以上、おしゃべりに付き合わせないでくれ！　道を教えるつもりなら、早く言え。できないのなら、ムダロをきくのはよせ！

さすらい人　　まあ、待て、若いの！　わしを年寄りと言うのなら、それだけの敬意を払わなけりゃいけないぞ。自分が知らないことについては、学ばねばならぬというものだ。勇気ある若者よ、お前がわしを誰だか知ったら、そんな悪口は言わないだろうにな。昔から気にかけていたお前から、そんなに脅されては、わしはとてもつらくなる。わしは昔から、輝かしいお前の一族を愛していた。激怒して、恐怖に突き落としたこともあったがな。至高の存在であるわしが、こんなにも優しくしているのだから怒りの念をかき立てたりはしないでくれ。そうなったら、わしとお前は破滅だぞ。あの小鳥でさえ、身を守るため逃げたのだ。カラスたちの主がここにいると気付いたからだ。お前だって、あの小鳥に教わった道をこのまま進むことはできないのだ。

ジークフリート　おいらを止めようというのか。お前はだれなんだ。どうして、おいらの行く手を邪魔しようと言うのだ。引き下がるのはあんたのほうだ！　あの炎の燃える場所へ、ブリュンヒルデのもとへと、おいらは行くのだ！

無理矢理、進もうとするジークフリートの前に、さすらい人が槍をかかげて立ちはだかります。

さすらい人　あの燃え立つ炎を恐れないと言うのか？　ならば、わしの槍で道をふさいでやる！　まだ、世界の支配権は、このわしの手中にあるのだからな。いま、お前が振るっている剣を、わしは昔、この槍の柄で粉々にしたのだぞ。もう一度、この永遠の槍で打ち砕いてやる！

ヴォータンが槍を前に突き出すと、ジークフリートは、その槍を一撃のもとに真っ二つに切り落としてしまいました。すると、霊剣と神性な槍の衝撃から発した稲妻は、岩山の頂きへまで飛んで行き、岩山の炎はますます勢いをえて燃えさかります。真っ二つに折られた槍は、さすらい人の足下に落ちます。さすらい人は落ち着いてそれを拾い上げます。

さすらい人　（後じさりしながら）　行け、もう、わしには、お前を止められない！

さすらい人は、突然、真っ暗闇の中に消えていきます。勢いを得たジークフリートは、角笛を吹き鳴らしながら、走って波打つ炎の中へ飛び込んでいきます。

名乗らぬさすらい人

さすらい人は、最後まで、ジークフリートの前で正体を告げません。「勇気ある若者よ、お前がわしを誰だか知ったらそんな悪口は言わないだろうにな」とか、「昔から気にかけていたお前から、そんなに脅されては、わしはとてもつらくなる」などと言いながらも、結局、自分がなにものであるかはいいません。結局、二人は、喧嘩別れになります。これでは、意味不明です。さすらい人にとっては、せっかく出会った愛する孫のジークフリートとの出会いです。なんのために、ヴォータンはジークフリートを待ち伏せて会おうと思ったのでしょうか？　それに、なぜ、ジークフリートとブリュンヒルデが出会う機会を、わざわざ、槍で持って邪魔しようと思ったのでしょうか？　ワーグナーは、その答えをいっていません。これは、いったい どうしたことでしょう ワーグナーさん!

槍とノートゥングとどちらが強いか？

ヴォータンは、ジークフリートに悪態をつかれたばかりではなく天下無双の槍まで折られてしまいました。《ワルキューレ》では、ジークムントが持っていた霊剣ノートゥングを見事に真っ二つに折ってしまった槍なのに、今度は逆にノートゥングによって真っ二つに折られてしまいました。いったい、槍とノートゥングと、どちらが強いのでしょうか？　ワーグナーは、その答えをいっていません。これは、いったい どうしたことでしょう ワーグナーさん!

これは、私の憶測にすぎませんが、《ワルキューレ》で、槍がノートゥングを二つに折ったのは、槍の威力でノートゥングの霊性を抜き去ってしまったからです。そのものに、霊性や神性を与えたり、抜いたりするのは、神々の王ヴォータンの思いのままです。このことは、ヴォータンがブリュンヒルデの神性を剥奪したことからも分かります。こんどは、ノートゥングが槍を二つに折ったのは、ノートゥングに霊性がもどり、槍が霊性を失った

からです。これも、ヴォータンがそうしたからです。ヴォータンは、もう、神々がこの世を支配することはあきらめました。その権威を人間にゆだねました。そのことを現すために、ヴォータンの象徴である槍が、人間の英雄ジークフリートの霊剣ノートゥングに権力を譲って折れたのです ― という、平凡な解釈に落ち着きました。このことは、ヴォータンとジークフリートの出会いが、ヴォータンとノルンの出会いの直ぐあとで行われたことと関係があります。ヴォータンは最後の頼りである運命の女神エルダに救いを求めたのですが、失敗に終わりました。ヴォータンがエルダに、「神々の終末は、もうわしの心を不安に満たさない」とか、「あの素晴らしいヴェルズングの若者に、わしの遺産（世界の征服）をくれてやるつもりだ」といった台詞がヒントです。

そして、槍よりもノートゥングが強かったのは、ノートゥングには、それを持つ、ジークフリートの指につけた「指環」の助けがあったからです。世界でさえ征服できるこの「指環」には、さすがのヴォータンの槍も敵わなかったのです。アルベリヒの指環は、無敵です。

【2023/10/07　都築正道】

【《指環》兄弟クイズの答 ： グンターとジークフリートの「義兄弟契りの場」です。ここには、汚れた血を引くニーベルング族のハーゲンは、儀式を行うだけで、義兄弟にはくわわりません。そういう立場なのです】（左から、大きな指環を吊したジークフリート、ハーゲン、グンター）